The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十一巻第一号　平成二十四年十二月

信心仏性

永原智行

浄土真宗の救済を、私は阿闍世王で具現しようと研究している。親鸞聖人（一一七三―一二六三）は、「信巻」で阿闍世の苦悩を解明し、救われがたい阿闍世を仏の正機とした。「信巻」で『涅槃経』の原文を読み替え、不可治から可治に転じた。私は、本論文発表までに、阿闍世の罪の告白とその実態から、五逆罪・謗法罪・一闡提であることを確認した。「信巻」の五逆罪や謗法罪の救済や、見・不見による一闡提の救いや、親鸞独自の一闡提観をうかがった。(1) この度は、逆謗の機が救われる論理として、信心仏性を考察してみる。

信心仏性

仏性について三因仏性と理行仏性とがある。

三因仏性は、人間に具有する真如法性の理を正因仏性と名づけて、それを了照する智慧を了因仏性とよび、了因を縁助する諸善万行を縁因仏性とする。理行仏性とは、人間における真如法性の遍満を理仏性（正因仏性）とし、この理性を開発するために衆生の菩提心と六度の加行を行仏性（了因仏性・縁因仏性）というのである。『往生要集』正修念仏章に、

一切衆生にことごとく仏性あり。われみな無余涅槃に入らしめんと。この心はすなはちこれ饒益有情戒なり。またこれ恩徳の心なり。またこれ縁因仏性なり。応身の菩提の因なり。二には煩悩無辺誓願断なり。これはこれ摂律儀戒なり。またこれ断徳の心なり。またこれ正因仏性なり。法身の菩提の因なり。三には法門無尽誓願知なり。これはこれ摂善法戒なり。またこれ智徳の心なり。またこれ了因仏性なり。報身の菩提の因なり。

（真宗聖教全書、以下真聖全一巻七八三頁）

と、仏教の因果を仏性の問題として、願生心が菩提心であるとの曇鸞（四六七―五四二）を受けて、作願門を仏性とする。

「真仏土巻」で『涅槃経』の随他意説、随自意説、随自他意説を、「わが所説の十二部経のごとし。あるいは随自意説、あるいは随他意説、あるいは随自他意説なり。」（真聖全二巻二三一頁）とひいている。『涅槃経』の随他意説、随自意説、随自他意説について、智顗（五三八―五九七）は『摩訶止観』で、

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

この三諦の理は不可思議にして決定の性無し。実に説くべからず。もし縁の為に説かば、三つの意を出でず。一つには随情説（即ち随他意語なり）。二つには随情智説（即ち随自他意語なり）。三には随智説（即ち随自語意なり）。（大正蔵四六巻二六頁c）

とある。随他意語は、仏から見て他である衆生の意に合わせて説く言葉である。随自他意語は、相手の機根を顧慮するとともに自らの悟りをも語る言葉である。随自意語は、仏自らの悟りのままに説いた言葉である。

『選択集』念仏付属章で念仏は、「随他の前にはしばらく定散の門を開くといへども、随自の後には還りて定散の門を閉づ。一たび開きて以後永く閉ぢざるは、ただこれ念仏の一門なり。」（真聖全一巻九八三頁）とあり、定散の法門は、方便として随他意でしばらく説くが、念仏が真実として随自意で説けば、定散の法門を閉じ、念仏の法門は永遠に閉じない。随他意説、随自意説の言葉を用いているが、随自他意説はない。

「真仏土巻」で、

善男子、つねに一切衆生悉有仏性と宣説する、これを随自意説と名づく。（真聖全二巻一三一頁）

と、『涅槃経』で仏の悟りの智見が仏性であり、智恵から見れば一切衆生には仏性があるとの仏の随自意説である。智恵が無ければ仏性は見えず、凡夫には仏性が無いことになる。智恵が開けたら、一切衆生は仏性を見ることができる。仏果である智恵から見れば、果である大涅槃が顕れる。覚ることが因で、果の大涅槃が顕れる。その因果が了因仏性であり、作願門の願生浄土の心が仏性という意味をもつ。

親鸞は、三因仏性の正因仏性、理行仏性の理仏性が衆生にあるかということを問題とした。衆生は、難化の三機・逆謗の死骸・無有出離之縁のものであり、その善は雑毒の善・虚仮の行である。親鸞は随自他意説で仏性を見ている。本具仏性は全く煩悩のためにその力用を失い、仏性なきに等しい。「真仏土巻」に、「惑染の衆生、ここにして性を見ることあたはず、煩悩に覆はるるがゆゑに。『経』には、「われ十住の菩薩、少分、仏性を見ると説く」とのたまへり。ゆゑに知んぬ、安楽仏国に到れば、すなはちかならず仏性を顕す。本願力の回向によるがゆゑに。また『経』には「衆生未来に清浄の身を具足して荘厳して、仏性を見ることを得」とのたまへり。（真聖全二巻一四〇頁）とある。ここにある性とは仏性のことである。親鸞は衆生の本具の「性見ることあたはず」の仏性の力用を一切否定して、一切衆生悉有仏性の大乗仏教の仏性論と異なる。親鸞は、すべての衆生には仏性を具有しているが、煩悩のためにこの世で仏性を見ることができず、本願力の回向によって往生の後に仏性を開くと説く。

衆生は如何にして往生成仏をするか。往生成仏は阿弥陀仏の本願力によるものであるから、他力回向の立場で仏性を解

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

釈している。名号に正因、了因、縁因の三因仏性を成就し、この仏性を修めた名号が衆生に回向されて、衆生の信心となる。信心仏性を因として浄土に往生し、仏性を開覚すると説く。このことは、「獅子吼品」を引く「行巻」一乗海釈に、

善男子、畢竟に二種あり。一つには荘厳畢竟、二つには究竟畢竟なり。一つには世間畢竟、二つには出世畢竟なり。荘厳畢竟は六波羅蜜なり。究竟畢竟は一切衆生得るところの一乗なり。一乗は名づけて仏性とす。この義をもってのゆゑに、われ一切衆生悉有仏性と説くなり。一切衆生ことごとく一乗あり。無明覆へるをもってのゆゑに、見ることを得とあたはず。（真聖全二巻三八頁）

とある。この文中の荘厳畢竟とは、仏果を得るための因行である布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六波羅蜜のことであり、行仏性（了因・縁因仏性）のことである。究竟畢竟とは因果をこえた究極的な真理そのものである理仏性（正因仏性）である。一乗法である名号に理行仏性（三因仏性）が修められ円具されている。衆生はこの名号を領受することにより当来に仏果を得る。

この理行に仏性を円具した名号が、衆生に廻施されることにより仏果を得る論理を、「信巻」三二問答にある。至心釈は、衆生には清浄真実心がなく（機無）、如来が六度万行を修してこの真実心を成就され（円成）、成就された至心を衆生に廻施され（廻施）、我等の至心は与えられた真実心であるから、いただいた相から言えば疑蓋無雑の一心（成一）にほかならない。（真聖全二巻五九頁）欲生釈は、衆生にはまことの大悲心はなく（機無）、如来は因位の時に徳を与えたいとの願心があり大悲心を成就した（円成）、大悲欲生心で衆生に与えてくださり（廻施）、我等の欲生心は如来から与えられた大悲心であり、いただいた相から言えば疑蓋無雑の一心（成一）にほかならない。（真聖全二巻六五頁）成一は信楽一心であり、至心と欲生は信楽に修まる。信楽は、「疑蓋間雑あることなし、かるがゆえに信楽と名づく」（真聖全二巻六二頁）とある。

至心と欲生が信楽の一心に修まる三心即一の信心は、「この心はすなはち如来の大悲心なるがゆゑに、かならず報土の正定の因となる。」（同）と、往生成仏の正因である。

また、三重出体来においても、至心釈で、「この至心はすなはちこれ至徳の尊号をその体とせるなり。」（真聖全二巻六〇頁）とあり、如来の名号が衆生の心中に至り届いて衆生の至心になる。衆生の至心のものがらは名号である。生仏相望の出体である。つぎに、信楽釈で、「すなはち利他回向の至心をもつて信楽の体とするなり。」（同）とある。信楽の体が至心であるのは、如来の名号願力が衆生の心中に届いたのが至心であり、その相は信心である。体相相望の出体である。欲生釈で、「すなはち真実の信楽をもつて欲生の体とするなり。」（真聖全二巻六五頁）と真実の信楽が欲生の体であるのは、

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

衆生を往生させるとの勅命を信受した相が、信楽であり、その作得生想は信楽の他に別にない。欲生は信楽の義別である体義相望の出体である。

生仏相望の出体で衆生の至心の体は如来の名号であり、至心の相が信楽であり、信楽の義別が欲生である。つまり、至心の体が名号であることは、衆生の三心は、名号が届いた相である。体相相望の出体と体義相望で、至心は体徳であり、心相が信楽であり、信楽の義別が欲生である。至心と欲生は信楽一心に修まる。

さらに、『涅槃経』「聖行品」を引いて、「実の諦は一道清浄にして二あることなきなり。真実といふはすなはちこれ如来なり。如来はすなはちこれ真実なり。真実はすなはちこれ虚空なり。虚空はすなはちこれ真実なり。真実はすなはちこれ仏性なり。仏性はすなはちこれ真実なり。」（真聖全二巻六一頁）とある。至心の字義は真実心であるが、至心は、至心信楽欲生我国と至心発願欲生我国・至心回向欲生我国とで意味は異なる。第十八願の至心は、衆生を救済しようとする真実心である。第十九・第二〇願は自力の真実心である。ここにのべる真実は実諦であり、唯一清浄の法である。真実は如来であり、虚空であり、仏性である。如来の真実が衆生に廻向されて衆生の真実となるのは信心による。名号の衆生への顕現が信心仏性である。

「獅子吼品」を引く「信巻」に、「善男子、大慈大悲を名づけて仏性とす。……大慈大悲は名づけて仏性とす。仏性は名づけて如来とす。大喜大捨を名づけて仏性とす。……大喜大捨はすなはちこれ仏性なり、仏性はすなはちこれ如来なり。……大信心はすなはちこれ仏性なり。……一子地はすなはちこれ仏性なり。仏性はすなはちこれ如来なり」（長文のため一部省略　真聖全二巻六二頁）とある。この中で四無量心・大信心・一子地を引いて大信心の仏性をあらわす。『涅槃経』の当分で、信心は仏法入門であるが、親鸞はこれを転用して真宗独自の信心仏性説を成立させた。大慈大悲・大喜大捨が四無量心であり、一切衆生を憐れむ心であり、四つの広大な利他心のことである。大慈は衆生に楽を与えることである。大悲は衆生の苦を抜くことである。大喜は衆生が楽しみ喜ぶのを見て喜ぶことである。大捨は他者に対して愛憎の心を捨てて平等に利することである。この四無量心を如来の大悲心に摂して、これが名号を通して衆生に領受される。四無量心は仏が衆生に成仏させようとする救済の心で、成仏の因となり、仏性となるべきものである。

大信心とは如来の回向される信心である。衆生は名号を通して六波羅蜜を具足した信心を領受するのである。大信心は衆生機相の信楽をあらわす、信心仏性である。このことを『浄

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

土和讃』に、

信心よろこぶそのひとを
如来とひとしとときたまふ
大信心は仏性なり
仏性すなはち如来なり　（真聖全二巻四九七頁）

とあり、異本の大信心の左訓に「我等が弥陀の本願他力を信じたるを大信心といふ、無上菩提にいたるを大信といふなり。」（真聖全五巻一五頁）とある。この仏性は、一般仏教では仏になる可能性であり、大乗ではすべての者にあるものとされているが、親鸞は如来が衆生に与えた信心をいう。信心は如来回向の仏智である。仏智である信心によって仏果が開ける。その信心の者を「如来とひとし」という。信心の者は果位の仏であるから、「仏性すなはち如来なり」という。

一子地は、すべての衆生を平等にわが一人子のように憐れむ心で、一般では初地・歓喜地の菩薩の境地をいう。菩薩がこの位に至れば真如をさとるから、再び退転することなく、必ず成仏できることが定まり、歓喜が生ずる。だから、歓喜地という。親鸞は怨親を平等にみそなわす仏心とある。『浄土和讃』に、

平等心をうるときを
一子地となづけたり
一子地は仏性なり
安養にいたりてさとるべし　（真聖全二巻四九七頁）

とあり、その異本の一子地の左訓に「三界の衆生をわがひとり子とおもふことを得るを一子地といふなり」（真聖全五巻一四頁）とあり、浄土に往生して、一子地の仏性を開くことで当来に得る大信所得の益を得るのである。如来の大悲心によっていただいた信楽によって浄土の果を得る。一子地は一切衆生を平等にみる位であり、浄土往生して得る。『華厳経』「入法界品」の「信心歓喜、如来等同」の偈文で、「他力信心」の偈文で、「賢首菩薩品」の頌偈は「信中の徳」「発心の勝能」をあらわし、証果を得る。

四無量心は救済の仏心であり、凡夫がおこすのではなく、名号として成就され、大信心はこの救済の仏心を体得させる衆生の信心であり、一子地は浄土に往生して開覚する証果である。われわれの仏性は仏の四無量心に基づき、この四無量心が回向されて信心の因となり、この信心の因が一子地として開顕するのである。

大信心は如来回向の信心である。凡夫が罪悪深重の自覚を離れることなく、「煩悩即菩提、生死即涅槃」を、凡夫が獲得するのは、「煩悩、眼を障へて見たてまつらずといへども、大悲、倦きことなくしてつねにわれを照らしたまふといへり。」（真聖全二巻四六頁）である。智見が煩悩具足の凡夫に開示される。煩悩に妨げられずに信受して涅槃がある。しかし、

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

実際には煩悩に眼が覆われている。親鸞が大乗の因果を因果一如といわず、果からの回向のはたらきに帰託する。果である涅槃が仏性であるのを、『唯信鈔文意』に、

涅槃をば滅度といふ、無為といふ、安楽といふ、常楽といふ、実相といふ、法身といふ、法性といふ、真如といふ、一如といふ、仏性といふ、仏性すなはち如来なり。この如来、微塵世界にみちみちてまします、すなはち一切群生海の心にみちたまへるなり、草木国土ことごとくみな成仏すととけり。この一切有情の心に方便法身の誓願を信楽するがゆへに、この信心すなはち仏性なり、この仏性すなはち法性なり、法性すなはち法身なり。

（真聖全二巻六三〇頁）

とある。涅槃は、滅度・無為・安楽・常楽・実相・法身・法性・真如・一如・仏性・如来といい、如来は微塵世界にみちていて一切群生海の心である。この心に誓願を信楽するから、この信心が仏性であり、法性であり、法身である。心に誓願を信楽するから、信楽が仏性である。『正像末和讃』に、

罪業もとよりかたちなし
妄想顚倒のなせるなり
心性もとよりきよけれど
この世はまことのひとぞなき

（真聖全二巻五二八頁）

と、煩悩の中にあって煩悩に汚されない清浄の仏性が衆生の心であり、その心は本願を信受することである。信心が仏性なのである。

まとめ

親鸞は、衆生の本具の「性見ることあたはず」の仏性の力用を一切否定する立場であり、大乗仏教の仏性論と異なる。衆生の往生成仏は、阿弥陀仏の本願力によるものである。名号に仏性を成就し、この仏性を修めた名号が衆生に回向されて、衆生の信心となる。

仏性は仏になる可能性ではなく、如来そのものである。「行巻」「真仏土巻」では所得の果としての果仏性である。「信巻」の仏性は、成仏の因としての因仏性を意味する。如来回向の真実信心によって、報土往生の後のさとりに達する。その因として信心は仏性であり、果としてのさとりも仏性である。

1　拙稿「親鸞聖人の阿闍世観」『龍谷教学』第四〇号　二〇〇五年、拙稿「親鸞聖人の阿闍世観（二）―阿闍世にみられる難化の三機が救われる論理―」『龍谷教学』第四二号　二〇〇七年、拙稿「阿闍世の廻心」『真宗研究』第五四輯　二〇一〇年。

参考文献

普賢晃壽『日本浄土教思想史研究』永田文昌堂一九七二年

〈キーワード〉信心仏性、四無量心、大信心、一子地

（浄土真宗本願寺派和歌山教区日高組教専寺住職）

NII-Electronic Library Service